

インタビューを書く

はじめに

インタビューの後には文字起こしが待っている。かつて「テープ起こし」と呼ばれた作業だ。多くの人のとって、インタビューは楽しくても、文字起こしとなると勝手が違うらしい。以下は、立花隆ゼミでインタビュー実習に参加した学生たちの会話である（『二十歳のころ I』の「立花ゼミ卒業生座談会」から）。

平尾 しかし、原稿を書く段になると腰が重くなつて困りました。

中村 話を聞くのは楽しいんだけども。

林 僕も、取材に行った後テープ起こして原稿を書くのが少し億劫でした。

平尾 立花さんが以前に、「取材だけ行って、原稿書かずに済んだらどんなにいいか」って言ってたことがある。本当にそ

コミュニケーション科学 五〇号

ういう気持ち。

しかし、わたし自身、インタビューでは原稿を書く作業が一番楽しいので、立花隆の「原稿書かずに済んだらどんなにいいか」という発言にも、学生たちの会話にも驚かされた。かつてゼミでインタビュー課題を出した際、文字起こしの話をしたらインタビュー時間を早めに切り上げようとする学生がでてきた。少しでも楽をしたいと思つたのだろうか。仕方がないので、そのときは最低でも二〇分はやるよう指示した。

学生にとっては億劫な、わたしにとっては楽しい、インタビュー原稿の作成にまでふれたインタビュー法の指南書はなぜかほとんど見かけない。それらの大半は、インタビューの設計と実施に関することから占められている。そのことも彼らを億劫にさせているのかもしれない。どう書けばいいのか。それがわかるだけでも気が楽になるのではないだろうか。そう考え、本稿を書き進めた。いわばインタビュー法の教材である。

川 浦 康 至

文字起こし稿とインタビュー稿

インタビュー記録は文字起こし稿とインタビュー稿とに分かれる。前者は文字起こしをベースとした記録、いわゆるトランスクリプトであり、後者はそれを元に構成された、読まれるための原稿である。

文字起こし稿は、その後の作業の基礎になるため、うまく聞き取れなかった箇所はインタビューに確認するようにしよう。また最終原稿はチェックしてもらうことをインタビュー前に説明したうえで、申し出があれば、この段階でも確認してもらおう。言い間違いや勘違い、修正・削除したい箇所があるかもしれない。反対に、インタビュー時には思いつかなかったけれども、あとから思い出したり、気づいたりして追加したいことがあるかもしれない。それらをインタビューに修正してもらう。もし本人が削除を要望した箇所、記録として残したい場合には、その理由を説明するか、代替案を提案することもある。残すことによる記録価値とプライバシー保護を両立させるためである。こうした一連のやりとりを通じて、インタビューもインタビュアーも相互に納得のいく記録に近づける（原稿作成にあたって、音声認識ソフトが使えるかもしれない）。

文字起こし稿として、実際のインタビューそのものではない。発話を文字にする方法は何通りもある。例えば、ひらがなで書くか漢字で書くか。テープ起こしの巧者、津野海太郎は『おかしな時

代』で、「私のばあい、テープ起こしでは、ひらがなを中心として漢字を補助的につかう。すなわち『漢字仮名混じり文』ならぬ『かな漢字まじり文』である。そうでないと、話しことをいきいきと文字化することができない」と書く。

表記レベルからして、すでに文字起こし稿は実在しないインタビューの記録である。文字起こし稿はインタビューの忠実な再生物ではないし、仮にそうしたいと思っても不可能である。

インタビュー稿は読まれるための記録であり、こうなるもはや作品に近い。インタビュー稿の理想は、あたかも目の前にインタビューがいるかのように読者が感じられることである。インタビューアーは、いわば読者とインタビューを取り結ぶ仲介役になう。それは文字起こし稿のままでは実現できない。インタビュー場面から話しことを抜き取っただけの記録だからである。当然ながら、読者はインタビューについてはもちろん当該テーマについてもインタビューアーほどの知識を持ち合わせていない。インタビュー稿はそれを前提に作る必要がある。いったん完成したインタビュー稿は書き手の元を離れ、すべて読者に委ねられる。

インタビュー稿の作成

インタビュー稿は大きく、以下の三タイプに分かれる。会話型、問わず語り型、「図と地」型である（表1）。

会話型 (Conversational format) はインタビューの発言とイ

表1 インタビュー稿のタイプ

タイプ	特徴	再構成度	書きやすさ	適用例
会話型	質問と回答の対で書かれる	低い	高い	インタビュー記事
問わず語り型	独白調で書かれる	中ぐらい	中ぐらい	口述史
「図と地」型	回答が地の文に組み込まれる	高い	低い	取材記事

インタビューの発言がセットになったインタビュー稿で、新聞記事や雑誌記事でよく見かけるタイプである。形式としては質問と回答の対になっていて、インタビュー場面そのもののように見えるが、インタビューそのものではない。実際、声を出してみれば、すぐに気づくはずである。たとえば、こんなふうに理路整然と話せるわけがない、あるいは話し言葉ではないと感じるに違いない。しかし、不思議なことに読んでいて違和感はない。会話型はさらに次の二種類に分かれる。Q & A型 (Question-and-answer format) と対話型 (Dialogue format) である。前者は、多くの場合、質問は整理して書かれ、回答は複数の質問に対する各回答の合成物として書かれる。また、実際のインタビューで関連発言が別の箇所出て来た場合、元の発言に含めて書かれることもある。会話だからと言って、必ずしも時系列にこだわらなくてもよい。対談に近いインタビューでは、インタビューアの発言にもそれなりの分量が割かれる。ただし字数レベルでインタビュー

アがインタビューを上回ると、どちらがどちらなのかわからなくなるため、実際のインタビュー場面はともかく、インタビュー稿ではインタビューアの発言文字数は抑えるようにしたほうがよい。

回答を見れば、どんな質問がなされたのかおおよそ見当がつく。このしくみを利用すれば、インタビュー稿に質問を含めるまでもない。こうした発想で書かれたインタビュー稿が問わず語り型 (Narrative format) である。回答が「私の名前は父が付けました」で始まれば、読者は命名者について尋ねられたと思うだろう。回答の冒頭に「命名者ですか？」と念を押すような一言があれば、なされた質問がより明確になる。問わず語り型は、読者からすると、常にインタビューの視点で語られるため、読みやすい。

最後のタイプが、インタビューの話を「図」として組み込み (際立たせ)、話の要約や背景、分析を「地」として加える「図と地」型 (Figure-and-ground format) である。「図と地」型はほかの二タイプにくらべ、インタビューアの視点が明確で、そのぶんインタビューの再構成度も高い。

インタビュー稿は、出来上がったらずインタビューにチェックしてもらおう。文字起こし稿は適宜、本人に見てもらえばよいが、インタビュー稿は人の目にふれるものであり、正確を期すと同時に、プライバシーを保障するためでもある。インタビューはインタビューとの共同制作物であり、インタビューを受けてよかったと思ってもらえるような後味のよいインタビュー稿に仕上げるのが望ましい。

実際のインタビュアー稿では上記三タイプの混合もありうるだろう。また、どのタイプにするかは、インタビュアーのテーマや展開、雰囲気、インタビュアーの特徴、インタビュアーの好み、文字数の制約から決めればよい。また二次記録を経ないで直接、二次記録つまりインタビュアー稿を作成する場合もある。インタビュアー稿は新聞や雑誌、書籍、ネットと媒体を問わず、よく見かける。それらを普段から読むようにして、センスを磨くことも作成スキルの向上に欠かせない。

インタビュアー稿の実際

二〇一七年、「暮しの手帖」編集部が「戦中・戦後の暮しの記録」を募集した。

「『戦中・戦後の暮しの記録』を募ります。当時、日本でお暮しの方で、戦争の影響を受けなかった人はひとりもないはずです。その日々のことをお話しくださいませか？」

その呼びかけの一環として、「聞き書き」のすすめ」と題する記事が同誌の第四世紀八八号（二〇一七年六・七月号）に掲載された。その中に原稿見本が紹介されている。見本は同一インタビュアーが二通りの書き方で示され、インタビュアー稿のいい見本にもなっている。一つが問わず語り型、もう一つが「図と地」型である。

以下に、それらを引用するとともに、その見本からわたしが再現した会話型を紹介する。同じインタビュアーにおける三通りの違

いを経験してほしい。

タイトルは「満州で生まれて」。聞き手は編集部、話し手は「上野由保子さん（女性八三歳、一九三三年七月十三日、満州生まれ。家族は父、母、七人きょうだいで、上から五番目）」である。

会話型

— 珍しいお名前ですね。

父の話では「由保子」という名前は「help by God」＝「神によって保たれる子」という意味だそうですよ。両親がクリスチャンだったんです。

— 満州にはどんな事情で渡られたのでしょうか。

父の仕事の都合です。私が生まれたのはいまの北朝鮮と中国との境にある安東という街で、国境を鴨緑江という大きな河が流れていました。その開発事業で母と来たそうです。満州では、わたしを含め7人の子どもが生まれました。

— そのでの生活はいかがでしたか。

満州はほんとに寒いところでね、冬になると鴨緑江が凍るのよ。そこでよくスケートをしました。街には日本人が大勢住んでいて、大和小学校という日本人小学校に通いました。洋風で立派な建物が多い、ハイカラな街だったのよ。ところが……。

— そうですね、1941年に太平洋戦争が始まりました。

当時8歳で小学生でした。確か12月8日でしたっけ、ラジオで開戦を知りました。たまたま病気で家にいたのでしょうか。子ども

ながらに、大変なことになったと思いました。それからまもなくして、父が日本へ帰ろうと言い出し、翌年の3月ごろ、釜山^{釜山}経由で帰国しました。帰国後は神奈川県の北鎌倉に住みました。――帰国後はどんな日々でしたか。

毎日のように上空にB29が来ていました。「警戒警報発令！」「敵機来襲！」とラジオがいうの。「空襲警報発令！」となると、照明のまわりに黒い覆いをかぶせなくちゃならなかったの。明かりが外に漏れないように覆って、下だけ灯るようにしていたわね。

問わず語り型

「由保子」という名前はね、「help by God」＝「神によって保たれる子」という意味だと父は言っていました。両親はクリスチャンだったんですよ。

わたしが生まれたのは、満州の安東というところで、いまの北朝鮮と中国との境にある街。朝鮮と満州の間には、鴨緑江という大きな河があつてね、父はその開発事業の仕事で母と満州へ渡り、わたしを含め7人の子どもをもうけたんです。

冬になると凍る鴨緑江でスケートをしたことをよくおぼえていますよ。満州には日本人がたくさんいて、大和小学校という日本人小学校に通っていました。それでね、満州はとってもハイカラな街で、洋風で立派な建物が多かったんですよ。

そんな日々のなか、1941年の12月8日ですね、家のラジオから米英と戦争（太平洋戦争）が始まったと聞こえてきたの。わたしは8歳で小学生でしたけれど、病気で学校を休んで家にいた

のだと思うんです。子どもながらに、大変なことになったと思いましたね。

まもなく父が日本へ帰ろうと言い出して、翌年の1942年の3月ごろに帰国することになったのです。釜山（現・韓国）まで汽車で行って、そこからは船だったと思います。

日本では神奈川県の北鎌倉に住みましたけどね、そのころは毎日のようにB29が上空に来ていて、「警戒警報発令！」「敵機来襲！」とラジオから。「空襲警報発令！」となつたら、電気も消さなくちゃならないとされていたので、照明のまわりに黒い覆いをかぶせて、下だけ灯るようにしていましたね。

「図と地」型

上野由保子さんは、1933年に満州の安東という街で生まれました。満州とは1932年から1945年の間、現在の中国東北部に存在した国だ。クリスチャンだった上野さんの両親は、「help by God」＝「神によって保たれる子」という願いを込めて、上野さんを「由保子」と名付けた。

朝鮮と満州の間には、鴨緑江という大きな河がある。上野さんの父親は、河川開発事業の仕事で妻と満州へ渡り、そこで7人の子どもをもうけた。

「満州はほんとに寒いところだね、冬になると鴨緑江が凍るのよ。そこでスケートをしていたことをよくおぼえています。日本人がたくさんいて、大和小学校という日本人小学校に通っていました。洋風で立派な建物が多、とてもハイカラな街だったのよ」

1941年の12月8日、当時8歳で小学生だった上野さんは、病気で学校を休んでいたところ、家のラジオで太平洋戦争勃発を知る。

その後まもなく父親の判断により、翌1942年の3月ごろに一家で帰国。釜山（現・韓国）まで汽車で行き、そこからは船だった。日本に戻ると、神奈川県北鎌倉に住まいを得た。

「毎日のように上空にB29が来ていました。『警戒警報発令!』、『敵機来襲!』とラジオがいうの。『空襲警報発令!』となると、照明のまわりに黒い覆いをかぶせなくちゃならなかったの。明かりが外に漏れないように覆って、下だけ灯るようにしていたわね」

立花隆ゼミによるインタビュー集『二十歳のころ』（最新版はランダムハウス講談社刊）は、会話型、問わず語り型、「図と地」型の三種類がすべて採用されたインタビュー稿の見本でもある（例えば、会話型は大江健三郎さん、問わず語り型は茨木のり子さん、「図と地」型は水木しげるさん）。適宜、参照してほしい。

インタビュー法の強み

方法論としてとらえたとき、インタビュー法の強みは、その人が実在するという確かなリアリティにつきる。

少数の人（最小値は一人）から何かを聞き出しても、その結果には代表性がなく、一般化できない（大勢の人に、二の共通質

問をして回るインタビューもある）。嘘が含まれるかもしれない。記憶違いがあるかもしれない。そんな批判がインタビュー法にはしばしば向けられる。しかし、これらの批判は当たっているのだろうか。

インタビューの対象となった人物は、誰もが時代のある社会に生まれ、「いま」を生きている人である。人はみな、その時代や社会の体現者であり、特殊な存在である。一般的な人、平均的な人は存在しない。各人の個別事情の先には、自ずと時代と社会が透けて見える。

インタビューは意図せず嘘をつくかもしれない。しかし、この問題は質問紙調査にも、それが自己報告である以上、あてはまる。大事なのは、語られた内容の真偽ではなく、少なくとも本人はそう語っているという事実のほうにある。

インタビューとはインタビュアーである。インタビュアーとインタビューイのビュー（見方や考え方）のインタビュアー（あいだ）に生まれる相互作用、その場限りの現象である。仮に同じ人が同じ人に同じように尋ねたとしても、時と場所が変われば、展開は変わる。その意味からも、インタビューを文字にして残すことは欠かせない。

インタビューを文字にする過程には、結果として追加インタビューが含まれる。そこで相互に、また新たな発見があるかもしれない。インタビューはインタビュー稿が完成するまでと考えると、そして、できあがったインタビュー稿をインタビューイに、そして読者に届けよう。インタビューイは、目前にいるインタビューア

ーを通じて、その先にいる人に向けても話しかけているからだ。

謝辞 インタビューの引用を許可いただいた暮しの手帖社に、この場を借りて感謝したい。

〔川浦康至（2019）インタビューを書く コミュニケーション科学、50、132-138〕